

■ 試験研究課題 中間評価結果（令和7年度評価分）

判定基準 A：実施妥当、B：内容に改善が必要、C：実施不適當

機関名：農業試験研究センター

課題名	研究目的・目標	得られた成果	研究期間	総合判定
<p>農業副産物を活用した高機能バイオ炭の製造・施用体系の確立</p>	<p>佐賀平坦部土壌を対象に、タマネギ-水稲の二毛作体系におけるもみ殻炭の施用効果及び限界施用量を明らかにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 水稲、タマネギ収量：慣行の同等～同等以上</li> <li>・ 透水性改善：慣行の同等～同等以上</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 温室効果ガス（GHG）：発生量は、タマネギ作（畑作のため N20 で評価）、水稲作（湛水条件のため CH4 で評価）ともに、もみ殻炭施用により低減する傾向にあった。</li> <li>・ 営農体系確立を目的とした生育、収量調査：タマネギ、水稲ともにバイオ炭施用による増収効果は認められなかった。施用による生育への影響も認められなかった。</li> <li>・ 粃がら炭の土壌混和の増加に伴い、タマネギでは増収する傾向にあった。</li> </ul>	<p>令和5 ～ 9年度</p>	<p>A</p>
<p>国産タマネギの安定供給に向けた持続可能なタマネギ腐敗性病害防除技術の構築</p>	<p>タマネギ貯蔵中の腐敗について、腐敗性病害の助長要因の解析を行うとともに、有効な防除技術の開発を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 収穫、貯蔵時の腐敗の助長要因解明</li> <li>・ 新たな腐敗防除技術の開発と導入</li> <li>・ 腐敗の発生を現行の7割減少</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 現地調査の結果、立毛中に発生した病害虫被害（べと病、アザミウマ）や多肥、塩基バランスの崩れ（Ca/Mg 比、CEC 低下等）が腐敗の発生を助長することを解明した。</li> <li>・ カルシウム資材については、べと病の発生を抑制し、二次的に腐敗の発生を抑制できる可能性が示された。ただし、べと病が発生しない条件において、カルシウム資材散布での体質強化等による直接的な作用による腐敗抑制効果は期待できないと推察される。</li> <li>・ 稲わらすき込みは圃場表面の乾きが早くなり、腐敗助長要因のひとつであるべと病の発生を抑制できることを明らかにした。</li> </ul>	<p>令和5 ～ 9年度</p>	<p>A</p>

機関名：果樹試験場

課題名	研究目的・目標	得られた成果	研究期間	総合判定
水田におけるモモ生産技術の開発	<p>早生品種を利用して自主施工しやすい導入方法で水田転換園における新規のモモ生産拡大を目指す。また、ブドウ型の根域制限栽培方法を用いて土壌の持ち出し不要な改植技術を開発し、栽培の持続化を目指す。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>水田転換園におけるモモの高品質果実生産技術の実証</li> <li>施設モモ栽培における改植技術の開発</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>露地モモ栽培における低樹高処理及び被覆資材利用の省力効果が明らかとなった。一方で、水田転換園における地下水位の影響は大きく、特に降雨時は栽培条件に関わらず、高土壌水分となり、平地との果実品質の差は見られなかった。</li> </ul>	平成 31 ～ 令和 10 年度	A
誰でもできる！ナシのジョイント V 字トレリス樹形の生産安定化に向けた技術確立	<p>佐賀県版ジョイント V 字トレリス樹形栽培技術のマニュアルを作成する。またジョイント V 字トレリス樹形における機械利用による更なる省力化技術を開発する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>側枝誘因角度の試験では、60° が望ましく、また誘因角度 60° のまま側枝を斜めに倒すことは果実肥大に有効であると考えられた。</li> <li>品種比較試験の結果、現時点では、「秋麗」、「豊水」、「ゴールド 20 世紀」、「甘太」が JV 樹形に向いていると考えられる。</li> <li>レールシステムの導入については、高所作業車での作業の軽労効果が確認できた。</li> </ul>	令和 5 ～ 9 年度	A

機関名：茶業試験場

課題名	研究目的・目標	得られた成果及び 次年度の試験の改善点	研究 期間	総合 判定
<p>ドリンク原料用生葉生産に特化した年間摘採整枝サイクル・施肥技術の確立</p>	<p>ドリンク原料用生葉生産に適する枝条・施肥管理技術を開発し、省力的な栽培方法の活用により茶業経営体の収益確保を図る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 秋に本整枝面から4cm上で仮整枝し、春整枝時期に目標の高さで整枝する秋春整枝を行うことで、慣行の秋整枝と比較して1.3～1.8倍の収量が得られた。</li> <li>・ 夏期の3回の防除において、尿素を0.5%濃度で混用することにより、秋整枝時における枝条密度や秋整枝量が増加するなど樹勢の維持・向上効果が得られた。</li> </ul> <p><b>【変更点】</b> 中間評価後、評価委員に対して、令和8年度の試験実施内容や成果の取りまとめ方法等の改善について再説明を行い、内容について了承を得た。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ドリンク原料用生葉に実需が求める品質基準が高くなり、コストや労力に見合った生産技術の確立が困難になったことから、試験期間を1年間短縮し、試験目的を既に成果が出つつある『多収』に特化した整枝技術及び施肥技術の確立へと見直す。</li> </ul>	<p>令和5 ～ 8年度 ※1年間 短縮</p>	<p>B</p>